

# 需給の調整、川上から 下戸

―国産青果物の流通や物流の問題点を挙げて欲しい。―  
下戸 日本は食料自給率はカロリーベースで37%、農家の高齢化や後継者不足は力ロリーベースで37%、

―併せ、新規参入が少ないのが理由だが、それは農家がもつからず、一部の企業が農業に参入しているが、もうかかっているのか、なれば担い手は出ないか。―  
JA(農業協同組合) 市場―仲卸という調整機能

―あるが、生産者が作りたいものと消費者の求めるものをマッチングできないという。需給を調整できる仕組みや、仲卸がその機能を果たしているのか、川上から変えていかないと、日本の食料安全を担保できない。―  
JA(農業協同組合) 市場―仲卸という調整機能

―農家の出なのでよく知っている。価格の乱高下も目の当たりにした。だから「農家は合風か」といって起るのか分らないので怖い。―  
JA(農業協同組合) 市場―仲卸という調整機能

―尋ねられたりした記憶がある。―  
JA(農業協同組合) 市場―仲卸という調整機能

―バランスが崩れ、牛乳をバターやチーズに変えることが奨励されたのに、海外からバター、チーズが入ってくる。国家戦略として食料の確保を真剣にやっていると必要がある。―  
JA(農業協同組合) 市場―仲卸という調整機能

# 国産青果物の安定供給

# 所得向上へ物流効率化

全国農業協同組合連合会(JA全農)と青果総合流通企業(FA)の連携が、物流インフラを相互活用して国産青果物の物流効率化を図る取り組みを推進している。JA全農の物流機能会社である全農物流(同)の寺田純一社長と全農本ライン(同)の下戸章弘社長が、目前に迫ってきた「2024年問題」の処方箋などについて語り合った。生産者の所得向上と物流効率化による国産青果物の安定供給を目指す考えで一致した。



寺田 純一氏  
1959年12月生まれ、宮崎県出身。83年3月九州大学農学部卒業。全国農業協同組合連合会入会。福岡支所生産資材部農機グループリーダー、人事部長、参事などを経て、2019年6月から現職。

―物流面の課題は。―  
寺田 JA全農青果センターから首都圏、近畿圏のラストワンマイルに当たるところを中心に手掛けている。全国的な産地の青果物を本格的に運ぶのはこれから。産地は選果や梱包などの作業をしながら東京の市場などに出荷するが、そうした産地の作業も人手不足に直面している。大半の青果物は鮮度が求められるので、24時間課題をクリアし

―た上で、良いものを的確に届けたい。―  
寺田 量販店の皆さんも産地の状況を考えて、納品条件の見直しなどを検討して欲しい。出さず側と受ける側の両方の問題がある。青果物流通の関係者が互いに少しく我儘すれば解決できることはある。

―下戸 ドライバー不足は運送業界の給料が若干安いのが理由の一つ。手積み・手下ろしの問題もある。社員が腰痛を退職理由に挙げた時は切ないものがあった。運送業界はルールだけが厳しくなっているが、長い目で見ればドライバーにもハッピーだと思おう。物流

―が目標を起すと、農家は青果物をお金に換えられない。―  
寺田 FA(農業協同組合)は全国14センターと全国をカバーするコールドチェーン(低温流通網)によって品質を担保している。法令を守り、合理的かつ効率的に運ぶ仕組みを設けようというところで、全農と一緒に国産青果物の安定供給に向け、産地貯蔵を具備する新たな生産販売事業(PEOプラットフォーム)を長野で開始している。これによってある程度は同じ価格と同じ品質の青果物を量販店に届けられる。

―要、国の政策の問題になるが、農地を集約してもらいたい。日本はルールがガチガチでプレーヤーが多い。今までの再生産に必要なお金を農家に渡せるのか。そのためのインフラを構築していく。―  
寺田 電化製品や自動車などメーカーは価格の決定権を持っている。価格の決定権がないのはセリに掛けられる生鮮野菜。あるスーパーの社長が大根1本の値段が100円から150円になったと、農家の実態を知らずにテレビで大騒ぎしていた。これはどうなのかと思う。当社は取替物を換金する手伝いをしている。

# 生産と販売連動性高め 下戸

―ドライバーの残業時間の上限規制が目前に迫る。―  
下戸 大量に運べる青果物は多くない。少量多頻度で運ばないといけない。片手間の問題もある。いかにトラックの稼働効率を高めるか。当社では全面的に出荷者との届け先、更に同業者社が何をどんな温度帯で運んでいるかというデータを収集している。産地まで集荷してトラックが集まるのに、産地で選果を担う人もいない。物流、中間流通でいかに効率化する

―物流会社は産地の中に入っていく必要性も出てくる。―  
寺田 物流からは離れるが、等級と重量をこなすにも細分化する必要がある。か。トマトを例にすると、多くの産地が10規格前後の選別出荷を行っている。運ぶ側も間違いを起こしやす

―現在10畝の面積でイチゴ栽培を始め、ロイヤルクイーンという品種を作っている。イチゴ栽培を始めたのは、イチゴの国内生産量が下げ止まらない環境下、生産者並に当社コールドチェーンへの相乗効果も含めると、ビジネスチャンスがあると判断したためだ。―  
寺田 撮影画像を基にAI(人工知能)を活用した出荷予測により、生産と販売の連動性を高め、生産者への手取りを増やすという新たなチャレンジの実験の場にもなっている。

―寺田 収穫物を引き取りに来てくれないと出荷できない。と産地から言われることがある。これからのキ

―寺田 取替物を引き取りに来てくれないと出荷できない。と産地から言われることがある。これからのキ

―寺田 取替物を引き取りに来てくれないと出荷できない。と産地から言われることがある。これからのキ



全日本ライン社長 下戸 章弘氏  
1960年8月生まれ、大阪府出身。83年3月関西学院大学経済学部卒業。大手銀行入行。2007年全日本ライン入社、FA(農業協同組合)の取締役を兼務。15年3月から現職。

―寺田 取替物を引き取りに来てくれないと出荷できない。と産地から言われることがある。これからのキ

―寺田 取替物を引き取りに来てくれないと出荷できない。と産地から言われることがある。これからのキ

―寺田 取替物を引き取りに来てくれないと出荷できない。と産地から言われることがある。これからのキ

# 農家支えるロジックつくる 寺田

―物流を担う両社の今後の連携プレーについて。―  
寺田 ロジックの重複機能は

―捨てる、取れない仕事を獲得する。すぐには形にならないかも知れないが、オリジナルのネットワーク

―クをつくる。それをより品質を落とさずにおく。しい状態で野菜と果物を届けられる。全日本ラインは

―寺田 取替物を引き取りに来てくれないと出荷できない。と産地から言われることがある。これからのキ

―寺田 取替物を引き取りに来てくれないと出荷できない。と産地から言われることがある。これからのキ

―寺田 取替物を引き取りに来てくれないと出荷できない。と産地から言われることがある。これからのキ